

日本人の自然観

はじめに

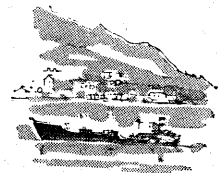
洛北に「円通寺」という寺がある。比叡山を借景としてとり入れた庭が有名である。京都の寺院には、庭の景色のつづきをふすま絵に描いているところもある。障子やふすまを開くことによって、人間が居住する空間である屋内と、戸外の自然がつながってしまう。さらに、そのつながった自然は、円通寺のように、遠く望む山へつらなっていく。人間の生活と自然との間に対立がなく、互いに融合しあっている世界、それが古き日本人の生活であり、日本人の自然観にも深く影響している。

現代の平均的な都会生活はいかがであろうか。自然と人間は、2DKのコンクリートの壁とアルミサッシでへだてられている。

太田次郎

自然と融合しようにも、自然そのものが失われ、そこなわれている。このような自然と隔絶された世界に住む人間、特にこんな世界で育てられた子どもたちは、どんな自然観をもつようになるのだろうか。それは、前にあげた日本人の伝統的な自然観とどんな違いがあるのだろうか。

この問題は、短時間に解答を出せるものではない。しかし、それを考える上の基礎として、日本人の自然観をもう一度見直し、西欧諸国のものと比べてみることは必要であろう。筆者は、この問題を専門的に研究しているわけではないので、折にふれて考えたことや、啓発された著作（特に寺田寅彦・和辻哲郎・筑波常治の諸氏のもの）を参考にして、随想的に述べてみたい。



山紫水明と地震・雷

山紫水明というやや古めかしい、少し懐かしい語は、かつての美しい日本の自然をあらわしている。日本は、日光が強すぎず、弱すぎず、年間を通じて適度の降雨量があり、地球上のどこよりも、植物の種類が豊かで、よく繁茂する地域である。緑色の自然に囲まれている。山紫とよぶのは、山の植物の緑が、水蒸気が多いことで、かすんで紫色にみえるためである。植物や農作物が多彩なことは、温和な気候と豊かな水に支えられた日本の特徴のひとつである。より正確には、あったという方が今の日本にとって適切であるかもしれないが……。

「地震・雷・火事・おやじ」とは、かつてこわいものの象徴であった。火事、おやじはしばらくおいて、地震と雷であらわせるいわば天変地異は、温和な周期的変化の中において、不規則に急激にあらわれる変化である。つまり、日本の自然は、寅彦の表現をかりると、次のようにまとめることができる。

第一は、気候の多様性で、大陸的な要素と海洋的な要素が交錯し、温和な周期的な変化の中に、不規則で急激な変化が起こる。第二は、地形的、地理的要素の複雑性で、火山および地震帯が交錯している。第三は、動植物および農作物が多彩なことである。

このような日本の自然の特徴が、日本人の自然観や、さらに広く日本人の思想の成立に大きく影響したことは疑いないであろう。

小春日和

日本語には、他国語に翻訳が不可能な優雅ともいえる表現がいろいろある。「小春日和」「五月雨」「春雨」、どれをとってみても、自然の姿が背景として浮かぶ語であり、「春雨」や「五月雨」は、決して単に「春の雨」や「五月に降る雨」という意味ではない。つまり、日本人は自然の刹那的印象をとらえて、それを表現しようとする傾向が強い。このことは、自然に接した場合、そのしぐみを調べようとするより、自然の移りかわりをじっくり見きわめようとするこのあらわれである。したがって、日本人は伝統的に自然の観察者であって、自然の研究者ではなかった。このことは、自然観だけでなく、芸術など広い分野にも影響を与えている。

このように、自然を観察できるのは、さきに述べた温和な気候や、やすらぎをおぼえる緑に恵まれたためであろう。住居という、人間の生活の場でさえ、自然と隔絶する必要がなかったわが国は、中近東のきびしい自然や、比較的寒冷で、植物にもとぼし

い西欧の大部分の国々とは大きな違いがある。

お茶づけの味

日本人は、食生活で淡白な味を好む。さらさらとお茶づけをかきこむ爽快感は、栄養学者がいかにか警告しても、なかなか捨て切れないであろう。

このような食生活になったのは、稲作を中心とする農耕のためである。イネは、連作がきき、土地の利用法として効率がよく、しかも豊富な水を必要とする。まさに、日本の風土にうってつけの作物である。主食としての米、副食としての野菜、海や川でとれる魚介類、これが日本の食生活である。

ところで、稲作は日本人の社会の成立に大きい影響を与えた。連作が可能なこと、豊富な水を使わねばならぬことは、一定の土地にへばりついた、他の土地との交流の少ない生活をつくりあげた。隣近所どうしは、土地を中心にした連帯感をもつが、(ときにはそれが村八分のような形にもなるが)ある地域に限られた、排他的で、保守的、独善的な社会をつくりあげ、古い生活態度を固執する傾向を生じる。

また、農耕は、自然の制約を強く受ける。台風、洪水、かんばつ、病虫害など多くの脅威にさらされる。これは、やがて無常感

を生じ、人力をこえた神々の支配についての思想ができる。少なくとも、自然のしくみを理論的に考えようとする西欧的な科学的思想を生じにくいことは明らかであろう。

ただし、断わっておくが、お茶づけの味に象徴される日本の稲作文化が悪いとか、科学的思考を生じにくいから、西欧の文化に比べて劣っているとか、未発達であるとか述べているのではない。ただ、農耕や稲作文化により生じる傾向を指摘しただけであり、人間の生活様式は、それぞれその時代、その環境や風土により適した形で行なわれていたと考えるべきである。

以心伝心

日本人は、知識の伝達を以心伝心であらわされるやり方にたよる。西欧のように、言語を知識伝達的手段とする傾向が少ない。

稲作文化の閉鎖社会では、人間はみな気心がわかった、意思の通じ合う仲間である。一杯飲んで、腹を打ちあけて話し合えば、わからないことはないはずである。したがって、ひとつの問題について対立する意見を述べあう議論は排斥される。理屈っぽいやつは嫌われる。議論する(極端な場合には、意見を述べることさえ)のは、けんかするのとあまりかわらない。人間の大きさなどという日本人にしかわからない尺度を、「清濁あわせ吞む」能力

ではかられたりする。

これでは、論理的思考形式が育つわけではないし、科学的思想が定着するはずがない。論理とは、知識人が特定の場所で用いるものであって、日常生活の上では大したことはない。したがって、論理を尊ぶ大学の先生方は、世間がわからない人々なのである。

明治以後、西欧的思考形式がはいつても、しょせんは、木に竹をついだ状態であるし、戦後の民主主義が定着しないのは、あたりまえのようである。

血の色のスープ

ある日本人の料理研究家が西欧に旅行し、レストランで食事したとき、トマトのスープが出た。たまたまレストランの照明がかわつて、スープの色が血の色に近くなつたとき、その人はまったく食欲を失つたのに、ヨーロッパ人は喜々としてさじを口に運んでいたそうである。ふつうの日本人がなかなか口にしない、血のしたたるビフテキを欧米人が好むのも、これと近い例である。

その原因は、ヨーロッパ人が牧畜民族の子孫であり、日本人が農耕民族の子孫であることであろう。牧畜民族は、農耕民族と違って、土地に定着せず、きびしい自然条件と戦わねばならない。

したがって、彼らにとって、自然とは人間の生活と融合できるほど温和なものではなく、人間の生活に立ちはだかる、人間と対立するものであった。それが、自然のしくみを知るための努力を生き、自然科学を成立させる動機となつたのであろう。

また、一方において牧畜民族は、人間と他の動物との間に明白な線を画した。家畜とは人間の衣食を支えるための動物である。彼らにとって、人間が主であつて、他の動物は従であり、両者が混然となることは考えられない。進化論が西欧に大きな反響を呼んだのも、人間と他の動物とのつながりを考えたところに問題があつたのであろう。この点、農耕民族はようすが異なる。四つ足の動物を殺して、その肉を食べ、皮を着ることは、農耕民にとっては、残酷で、野蛮なことである。動物愛護の精神がイギリスで唱えられたのは、彼らの日本人からみれば野蛮にみえるキツネ狩りなどに対する一種の贖罪行為と考えられないこともない。

文明開化

このような伝統的にあまりに異質な二つの文化が、ふれ合い、独得の結合をしたのが、日本であろう。長い鎖国の後で、明治維新以後急速に西欧文化が輸入された。まず、はいつてきたのは、抽象的な科学ではなく具体的な工業産物であつた。鉄道・船舶・

電信・電話機、明治の日本人の目にふれたのは、まさに文明開化という語であらわされるものであった。ともかく遅れをとりもどし、追いつくためには、理論よりも技術の方が必要であった。科学とは、その底を流れる合理的思考と切り離されて、文明開化を導く、摩訶不思議なものであった。

このような風潮は、明治百年をすぎた現在でも根強く残っている。最近のコンピューター・ブームなどもその一例であろう。しかし、ともかく、日本において、異質の二つの文化が接し合ったことだけは、確かである。そして、その間をつなぐものとして、おびただしい漢語がつくられ、最近では西欧語を語源とする新造語もつくられている。われわれは、そのような新造語で論理を考へながら、また伝統的な自然観や社会観も温存している、世界的にみれば不思議な国民であろう。

自然にふれる

今まで雑然と述べたことが、「幼児の教育」とどんな関係をもつか疑問に思う人もあるであろう。しかし、領域「自然」で扱われている自然観察を考える場合に、深い関連がある。幼児期の教育目標として、よく「豊かな人間性を育てる」という語が使われる。豊かな人間性や、好ましい人柄とは一体何なのであるか。

われわれが伝統的にもってきた、自然観や社会観を育てることであるか。それとも、西欧的合理主義を信じる人間を育てることであろうか。自然の観察にしても、伝統的な観察者の立場を守るべきか、それとも研究者を育てるべきであろうか。「それは、その人の進路によって定めればよい」というのもひとつの解答であろう。しかし、実際には、自然観察を科学教育の一環として考える人々がふえ、そのような教育が広まりつつあるのではなからうか。そして、論理や思考よりも知識を安易につめ込むことが行なわれているのであろう。

山紫水明の世界は、急速な工業化の前にくずれようとして、日本人の生活もまた急速に西欧化している。だからといって、伝統的な自然観はそう短時日にかわるものとは思われない。これ以上、自然の破壊を無差別に行なうべきでないことはいうまでもなく、また人間の力の無力さと、人間の営みへの過信とを切実に考へねばならぬ時代となった。今、われわれは、多くの選択を迫られ、そのいずれもが簡単に二者択一できないものである。

せめて、自然にふれることの少なくなった子どもたちに、自然と接触する機会を多くしようというぐらいしか、対策の立てようのないのが現状といえるかもしれない。

(お茶の水女子大学)